

その森の昆蟲相を解明したり虫達の生息地を観察する等いろいろの面の活動に向ふはめでた事ではあります。今はハレ近年、この「生物多様性」という言葉をよく耳にする機会の多いが、この言葉がこれまで森林を賑わすに留まれば、「生物相の保全」とはちがうのに市民権が与え多様性を想起して欲迎兼得べきことではあるが、誤った形で虫達は危機を実感するに必要なデータをばく露され持ちあわせているのだろうかと思わずにはらられ我慢ぶ但馬を離れて18年も帰省するたびにさき慣習を親北さんほん心地の心地がどんづらひ変わつて行く速さを一握の感覚を感じじはまざ、き思と、あの頃の昆蟲相も大きく変わってしまっているのだろう、地元の自然の素晴らしさをきっちりと記録し続けておくことが大切である。「保全」という面から見れば少々積極性に欠けるかもしれないが、足繁くフィールドに通つてそういう意味でのチラシを頒布していくことが地域同好会の一つの社会的役割ではないだろうか。

五 稽賬

喜び大 **アナと出会った場所** 永崎嘉之

走馬原に山地の4年間は本当に走馬と馬を通ったものである。山出かがる先駆者たて走馬であり、採採した虫のラムサウルスが走馬のむのだった。手を握る地高校生の頃から、ウサギやキツネ、ショウジョウやホウセイ、アシナガバグが低地にはひだり所にはひだり走馬に憧れただから、動機から見て昆虫の低位分布、口ばかりの顕尾内では山地にじかない吸蜜虫が平地暮らすなどさんいるという現象を意識した上のものであつた。その後、私の興味はこの低位分布と地質問題に終始している。もがく地図夢中にならるのが、標高の低地地域のオナ様であるたけ若草大、やまでさき瀬南卑躬自然公園の自然、大小計20種類以上を調査してきましたが、それが低地にも分布するといふと驚異まで知っていたが、1992年以降、オナの開花時期が他の植物よりも早く、若草の時期が通常より分布調査も楽なことが気付き、早春の山を歩き回り、当初は温泉町鐘尾や檜尾に見られる山野草、集落の脇に存在する木林に驚いていたが、そのうち徐半山森林深くのめり、山のようやうな坂の、湖海がちすぐり場所に位置するまでの起伏は富山港山半島の大部がブナに覆われたあたり、賀賀所にあつては茶林の中にスダジイやツバキなどの老木が見られ、森全体が独特的の植物相をみせる。低標高ながらヨコモコやヤクザンジンソウがミミツリ、アゲハリ、ウツボグサが繁茂して山間のアツカヒナシ等の用葉

虫たちの中で、世界的に見てもブナ属と強く結びついた種というのはどのような顔ぶれなのだろうか。例えば、フジミドリシジミは近縁種が台湾や中国大陆にも分布していて、やはりブナ属を食樹としている。ブナと共に分布を広げて、各地で種分化を起こしたと考えてよいだろう。チョウ以外では、特に甲虫では、このような種はあるのだろうか。ヨコヤマヒゲナガカミキリなどは、その可能性があると考えている。少なくとも日本ではブナのみを食樹として、北海道を除けばブナと重なる分布を示す。一方、同じブナの生木を食べる種でも、クワカミキリの場合は対照的な例である。非常にブナ属を好むが、種や属の分布から考えると、分布域の北限付近の個体群が食性をブナ属にまで広げたにすぎないのであって、ブナ属との出会いの歴史はおそらく浅いのではないかと思う。さらに、ホソコバネカミキリ属などはまた別の例で、世界各地でそれぞれの土地の極相林を生活の場としているために、日本では一見ブナとの結びつきが強いようにみえるのではないだろうか。

遠く中国、台湾などにもブナ属の樹木が分布することは古くから知られていたようだが、最近 *Sibatania-zephyrus* 属の蝶の発見によって、にわかにブナ属が虫屋の注目を集めたように思われる。私は他人と同じことをするのが苦手なひねくれた性格をしているので、注目を集めている虫にはそれほど興味をかきたてられないのだけれど、台湾や中国の各種のブナ属の自生地を訪ね歩いてその甲虫を調べ、ブナと共に繁栄し種分化をしてきた種をさぐり、その起源について考えてみたい、という夢は描いている。しかしながら現在は中国大陆などでは自由に採集ができる場所も限られるようだし、私もこれまで但馬以外はほとんど歩いたことがないから、まずは国内各地のブナ林を歩くことから始めたい。

但馬に通っていたころは、年間を通してひとつの地域の季節が巡る様子を眺めてきた。そこから得た自然観と、地元の人から受けた好意とは、これからも大切にしていきたい。浜坂の城山や観音山に、汽車で2日おきぐらいいに通っていた時期があったが、ある人から、君はよく出会うから浜坂で家庭教師をしないかと声をかけられたことは、たえず外来者であることを意識して、地元の人人に引け目を感じていた私には嬉しい出来事だった。

今回のIRATSUMEの原稿をまとめるにあたり、鳥取に住んだ最初の年の採集記録を拾い出す機会があった。浜坂に自転車を置いて走り回り、関宮に行きたくて氷ノ山を越えて歩いた頃、ひとつの種類をたくさん採集することに抵抗があり、頭数を決めながら探っていたことなど、

いろいろ思い出されて懐かしい。いろいろな虫との出会いは今なお鮮やかな感動を伴って蘇るけれど、それは独りの感傷にすぎないから、いちいち書き留めることはよそう。ただ、最近は初めての場所へ出かけても昔のように感動する場面が少なくなった。最も感性が豊かだった時代に過ごした場所が但馬だったということは事実のようだし、いまだに私が但馬の山々にこだわりつづけるのは、上に書いたような興味もさることながら、昔のひたむきだった自分の影を追いかける気持ちがあるからだと思う。もちろん、自然の豊かさも大きな魅力ではあるけれど。

但馬通いの日々

加野 正

今回で「IRATSUME」も20号になる。ということは但馬むしの会も20年つづいたということになる。大変嬉しいことである。私自身は現在コロンビア国に在住しており、但馬との関わりはなくなったが、一時期但馬に通い、ムシを追いかけた頃があった。

但馬むしの会は、豊岡高校生物部のOBと地元の昆虫愛好家の努力によって創設されたと聞く。私が入会したのは、会の創設後数年たってからだと思う。但馬出身者でなく、また、但馬のムシを調べていたわけでもない私がこの会に加わったのは、鳥取大学の後輩である石田達也氏の勧めによるものである。当時の私は日本の各地を歩き回りチョウを探集していたが、じっくり立ち止まってムシの調査ができる自分のフィールドをさがしていた時期であり、すぐに入会した。私は大阪生まれで、その後兵庫県南部に移り住み、大学時代は鳥取で過ごしたということもあり、地理的にも親近感を抱いた。自分のフィールドでムシを調べるというのは、コレクションとはまた一味違ったムシの楽しみかたができる。

入会当時はちょうど大学での卒論研究をしている頃であり、統く2年間は大学院の修士課程で修論研究を行っていたので、但馬との関わりは薄かった。私が積極的に但馬に通い始めたのは、大阪の某薬品会社に就職して後の1980年以降である。1986年に青年海外協力隊でコロンビアに派遣されたので、実質6年間ほどである。

大阪在住の谷角素彦氏、京都在住の足立義弘氏、少し遅れて入会した島田真輔氏そして私の4人がよく一緒に但馬に通った。当時我々の間では、京阪神支部と自称し